



壺屋、そして沖縄の素晴らしさを 広く発信したい

「うちなー茶屋ぶくぶく」店長 横江柳子さん

連なる赤瓦屋根が独特の風情を感じさせる壺屋のやちむん通り。樹齢三〇〇年余のがじゅまるに守られるように、国指定重要文化財である琉球王府の御用窯「東(あがり)又窯」とその母屋「新垣家」が当時の佇まいのままに姿を残しています。その隣に昨年開店した「うちなー茶屋ぶくぶく」は壺屋の新名所。壺屋に魅せられた店長、横江柳子さんを訪ねました。

カブエの原点？ 泡が楽しい「ぶくぶく茶」

沖縄最初の親子ラジオ局だった建物を改装した茶屋は、琉球とアジアのテイストを融合させた心和む空気が漂います。ぶくぶく茶は「福々茶」ともいわれ、明治から昭和初期まで那覇の中流以上の家庭で好まれ、祝い事で振る舞われていたとか。「庶民が気軽に楽しみ、嘉例(かり)をつけたお茶。お祝いでは赤飯を少し入れるなどのアレンジもあり、今というカブエの要素があったのでは」と横江さん。煎った米を細かく砕き、水に溶かして大きな茶



こんもり盛られた泡は不思議な口あたり

「恋に落ちて」…… 壺屋との運命的な出会い

国際線・国内線の客室乗務員だった横江さんと壺屋の出会いには数年前。本土の友人を案内するために訪れ、その途端「恋



連なる赤瓦屋根も壺屋の魅力のひとつ

に落ちた」といいます。歴史の趣を感じさせる街並みや独特の空気感にすっかり惚れ込み、以来、この街に住みたい、壺屋焼などの素晴らしい文化を広く伝えたいと思うように。元々お茶が好きで、国内外で出会ったお茶を出す店をやりたかったこともあり、「壺屋らしいお茶を」とぶくぶく茶を独学で勉強。オーナーの賛同を得て、「福」に



琉球とアジアが素敵に混ざり合う、緑豊かな茶屋



壺屋の歴史をずっと見守り続けてきた、趣ある東又窯

大好きな壺屋の 活性化をめざして

茶屋で使っている器はもちろん壺屋焼。手作りのお菓子は県産の素材を使い、現在、自宅で気軽に楽しめるぶくぶく茶キットの構想も温めています。また、横江さ

ちなんだ十月二十九日二時二十九分二十九秒にうちなー茶屋ぶくぶくをオープンしました。

んは壺屋通り会の最年少会員でもあり、常に壺屋のために貢献したいと考えています。「壺屋の人や建物、木や風に沖縄の温かさを感じます。家族のような、ふるさとのような存在。まだまだ新参者ですが、先輩方の意見をいただきながら、協力して壺屋を活性化できたらうれしい」。古い伝統に新しい風を吹き込みながら、横江さんは今日も元気に奔走しています。



うちなー茶屋ぶくぶく店長
横江柳子さん

1973年、浦添市生まれ。専門学校卒業後、日本トランスオーシャン航空(株)に入社。(株)日本航空へ出向となり、国際線の客室乗務員として2年間勤務。その後、国内線で約7年間勤務し、壺屋に魅せられる。退社後は壺屋に移り住み、設計や店舗経営を行う会社に転職。2004年10月、「うちなー茶屋ぶくぶく」の店長に就任。壺屋通り会会員としても活動中。